



楽しく学ばう！

「デカパンリレー」は大きなズボンをはいて行う二人三脚のようなもの。ルールに基づいて身体を動かし、ペアで協力しあうことと、チームワークを体得してもらうのがねらいだ。デカパンはJICAボランティアが協力している女性起業グループが染色した



ダルエスサラームのジェフディ中等学校の子供ソフトボールチーム。キャッチボールやノックを行い、生き生きと運動し、チームとして規律正しく行動する姿を披露



JICAタンザニア事務所
伊藤美和さん
企画を担当。予算が限られているなか、日本企業13社とタンザニア企業1社に協賛をいただき感謝しています。『目指せ、オリンピック』を合言葉に、日本のスポーツ振興をアピールできる場にもなりました
競技会のスタッフらと。写真手前の黄色Tシャツ姿が伊藤さん



主役は女子！

LADIES FIRST 女子陸上競技会を タンザニアで初めて開催！

男女格差を表した「ジェンダー不平等指数」で世界129位(159カ国中)*のタンザニア。女性への暴力や若年妊娠が問題となるなか、女性の社会的地位向上をめざして、JICAの協力により初の女子陸上競技会が開催された。

*UNDP「人間開発報告書」(2016)

文●田中弾(編集部)

世界に羽ばたくチャンスを得て、真剣に競技に打ち込む女子選手たち。のべ約1,500人の観客が選手たちの雄姿を見守った



ドドマ ダルエスサラーム

3



タンザニア

タンザニア連合共和国

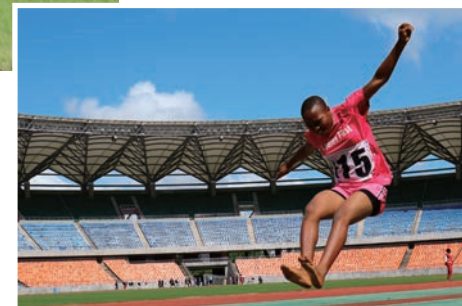
首都：ドドマ

通貨：タンザニア・シリング

人口：5,557万人(2016年)

公用語：スワヒリ語、英語

1964年、タンガニーカ共和国(本土)とザンジバル(島しょ)が合併した連合共和国。首都はドドマ、経済中心地はダルエスサラーム。都市部と比べて地方は今も男女格差がより残っているといわれる。



陸上競技協会から選抜された女子選手は10代後半が中心。選手のTシャツはイカンガーさんが現役時代にお世話になっていた「アシックス」からの寄付



実施競技は11種目。100m走、200m走、400m走、800m走、1500m走、5000m走、10000m走、やり投、砲丸投、円盤投、走幅跳が行われた

タンザニアの 女子陸上選手に機会を

スポーツは男性がするもの、女性のスポーツ能力が同じくらいであれば優先されるのは男性——タンザニアのそんな風潮に長年問題意識をもっていたのが、同国出身のマラソン選手として活躍し、2016年からはJICAタンザニア事務所の広報大使を務める、ジュマ・イカンガーさんだ。

タンザニアにも、もちろん女子の陸上選手はいる。ただ、練習する機会も競技会に出る機会も、男子選手に比べて極端に少ない。周辺にはケニアやエチオピアなど陸上競技大国として名を馳せる国々もある。イカンガーさんはタンザニアにも「原石」が眠っていると確信し、発掘し育てるためのスポーツイベントの開催をJICAに相談した。JICAタンザニア事務所の伊藤美和さんは次のように話す。「タンザニアは女性の社会進出が進んでおり、企業で管理職に就いている女性の率も日本より多いと感じます。しかし、都市部はまだしも地方では、男性による女性への家庭内暴力が多いとも聞きます。女性に光が当たっているところと、そうでないところのギャップが大きいと感じていました」

こうした現状をふまえて、イカンガーさんとJICAが団結して当日は全国31地域の3分の2以上にあたる24地域から105人の選抜選手が集まった。女子の競技会が年に1度あるかないかのタンザニアで「国家的な取り組み」とイカンガーさんも喜んだ。交通費が各地域または自己負担のため、貧しい地域からの出場が難しい選手がいることは承知していたが、それでも、女子選手を送り出すために関係者が費用を負担し合ったケースもあった。

各競技は「目指せ、オリンピック」を合言葉に女子のオリンピック選手を輩出しようと公式ルールで行われた。選手や引率者から「記録が残るのがうれしい」「女子に目を向けてもらえるいい機会」という喜びの声が次々と上がった。また、会場ではJICAボランティア発案の「デカパンリレー」が行われたり、シニア海外ボランティアの協力でタンザニア唯一の女子ソフトボールチームがデモンストレーションを披露したりし、草の根技術協力をを行う「Class for

挑戦したのが「レディーズファースト(LADIES FIRST)」、すなわちタンザニア初の女子陸上競技会だ。目的はジェンダー平等、女性のエンパワーメント(能力開花)の実現とスポーツ振興、体育科教育の普及などにある。

楽しく男女格差是正に貢献

開催には、タンザニア情報・文化・芸術・スポーツ省(以下、スポーツ省)と、同国のスポーツ振興センター(NSC)からも快い賛同を得られた。競技会は17年11月25日(26日)は女性に対する暴力撤廃国際デーに決まり、国内最大都市であるダルエスサラームの国立競技場を無償で使えることになった。

「出場選手は全国各地から募りました。日本の約2.5倍もある広い国ですので、集まるだろうかとは最初は不安でした」

伊藤さんは準備期間をそう振り返る。しかし、

JICAタンザニア事務所広報大使
ジュマ・イカンガーさん
1984年、86年の東京国際マラソンで優勝。ロサンゼルスとソウルのオリンピックに出場した元マラソン選手。タンザニアで陸上クラブを主宰し、若手選手の育成に励んでいる。「レディーズファースト」の開催はJICAの協力があるからこそ。今後はタンザニア政府に予算をしっかりと確保することを促し、JICAとともに継続して実施していきたい」



「Everyone」は、この機会に若年妊娠をテーマにした絵本を約1000冊配布して読み聞かせを行った。

さらに競技会前日には大阪大学の岡田千あき准教授が、大会審判や技術スタッフ、陸上競技協会職員約80人に向けて、子どもが身体を動かすことの重要性を説いた。成長期に背骨が曲がってしまう症状のチェック法など実技を交えたアドバイスは、座学中心の体育で育った彼らの目に新鮮に映った。スポーツ省のムワキエンベ大臣は、陸上競技会のみならず、盛りだくさんのサイドイベントを目的の当たりとして、「これからは私たちも女性の地位向上に力を入れて取り組む」と決意と称賛を表明した。参加していた引率者も「大臣の発言からもこれから女性の地位向上に期待が持てる」とイベントは非常に好意的に受け入れられたのである。

日本では2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて山形県長井市がタンザニアのホストタウンに登録されている。今回出場した選手の何名かは同市で行われる今年10月のマラソン大会に参加する予定だ。スポーツが人をつなぎ、タンザニアの女性が脚光を浴びるチャンスが広がったのだ。今後、このような関心と気運がますます高まることを願いたい。